次第

時雨をいそぐ紅葉狩、深き

山路を尋ねん

是ハ此あたりに住女にて候。実やながらへて

浮世にすむとも今ハはや誰

志ら雲の八重葎しげれる

宿のさびしきに人こそみえね

秋乃きて庭ぞ白菊うつろふ

色もうかぬ北たくひと哀なわ
錦さへし花の下くれしくなく
そし筏なすらめ流し四方の梢も
なかりしきにともなひ出給
花の色紅葉乃いろも同し
たひて下紅葉よ秋まの露や
深つゆ世つく野乃原ハきのふ

よそ見ぬの舞く様なみをなり
のこ乃山涼ミ笑や谷川よ風の
うけたる志りつ見え気なすら花も
座ろぬ紅葉をさかふそは錦中
たし葉と先末乃末ゆ立よわて
四方の梢をなすらめそ志りしく
座しうんたまん座　面白や法之

山のきの光乃うけちなきを分ふ
ぎんはのひろたく人なかく
実や予乃聊りぬ男得と孫山乃
奥よあて人来まえし とまち
山巻て獨なりすゞしめうち流
竜乃へしき由かのまをせ殿あを
旅ともしまかうぶ限やまちとだ多

情ちとにかう袖て世ふ計ちわ
志のふもちれわ旅る衣じしせ
路をぬるのへ乃後よ立寄给へ
うし思ひのうすの法事や
嬉しまかなはとめ给ふへきと
ずろぬやまりてさりちあら
那きき巻をみ孫情ちとやご村竹乃

かほりを留ぬ人とても
思ひ飛ひ胸すゑさまく計なり
きなきさうよ人ちり埃さそふらく
かし気竹乃葉の露そわかつふ
うきとしは思ひしとも色よ
向居屋かりはんかずら飛え仏も
いましめのさいは楼々多悲飛と

ぎとよ飲酒をやかなは邪婬
妄語も誰まぶ乱んの花のはう
ずし殺生ハまろ世ふもだくひ
あし引山桜乃乃春めも
いの影ぞ世はしやおりへえ
見とそも当世の数皇法かうぬ
ぶの義情乃いはなりてつずし傳

折しも花のへ乃草葉に露の
かことなしの音をうかれけれ
なき繁るもりの眼あるに巻にバ人の
心もしらで雲にうちやつして庵
寧色かへて時刻も経るまゝ
雲ゐあしに舞ひなまめかしの
まさき葛此墓被の袖乃ちりわ淺

洩りきし月乃さしいりきさらば
袖も露をめぐらすたもとの眼
だんにこゝろうたしは萩
まさ暮に地はな葉末端の地
み涼風しく秋遠く空よ雨うち
うくを嵐乃物は一夜山陰よ
月待難にうたゝまかげ寝袖も

露ふりし夢しさましたまふ
となく〳〵　悉洗猿や刹那のうち
悪風の酒乃破心ずまどろむ世隠も
なき夜ふかしあらぬあらしき風
驚かす告と　驚く枕に雷火乱れ
天地も響く風車乃だれきも
まろぬ山中におかれなし嵐

おりふし風　不思議や今まで
ありつる女　とりどりに化生乃
姿を現し　或は巌に火焔を
放し又は虚空に焔を降らし
かゝし　咸陽宮の烟乃なかに
七尺の屏風乃上に猶余りて
そのたけ一丈の鬼神乃角は火本

眼ハ日月面をむくへきやうぞ
なき　惟茂かもさえのしゝ
ろ穂もちゐこしもさわりふ大方
りし南無や八幡大菩薩と心よ
志しけれなをぬけて待のけ
くるまのへ大微塵よあきん飛て
うち敵をとひちうひせけるとなり

鬼神のまなかをさしとをせは
所を頭をつかむてあからむと
するをきりはらひ給へは劔に
おそれて巌にのほるを引おろし
さしとをしとなしたちまち
鬼神をしたかへ給ふ威勢の
ほとこそおそろしけれ　巻ノ終